

ベルリン市パンカウ区の建築

お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

はじめに

ベルリン市パンカウ(Pankow)区とはドイツの首都ベルリン市の一つの行政区である。筆者がこの区に興味を持ったのはブルーノ・タウトについて調査をしていた時である。ブルーノ・タウトは社会主義の集合住宅をベルリンに沢山建設した「社会主義の建築家」とも言われる。ブルーノ・タウトに社会主義の影響を与えたのはエーリッヒ・バローン(Erich Baron)という社会主義者であった。バローンはパンカウ区に住んでいたことから、氏の旧宅^{註1)}を訪問したことがあった。その時にパンカウ区には興味をひかれる建物が沢山あることを知った。パンカウ区は旧東ベルリンの区で筆者が西ベルリンに滞在した1971~1973ではなかなか訪問が困難であった。したがって訪問したことはなかった。戦時中激しく爆撃を受けたベルリン市にあってパンカウ区は被害が少ない区であった。2001年にベルリン市で行政改革が行われ、旧パンカウ区と、旧ブレンツラウアー・ベルク区、旧ヴァイセンゼー区が合併し現在のパンカウ区が成立している。人口38万人、面積103.1km²とベルリン市で最大の区となった。

ベルリン市の中心部からは地下鉄(U-Bahn)でも高架電車(S-Bahn)でもパンカウに行く事が出来る。パンカウの駅舎も歴史を物語る風情のある建物である(図1)。以下筆者が興味を持ったパンカウ区の建物を紹介する。

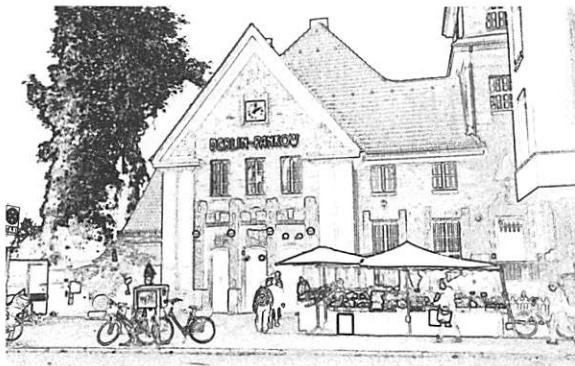


図1 パンカウ駅駅舎

1)パンカウ教区の教会 (Pfarrkirche Pankow)

所在地 : Breitestr. Pankow

建設年 : 15世紀

建築家 : Friedrich August Stüler

パンカウ教区の教会は長く広がる牧草地に建設された。村が発足した1230年にはこの教会が建設されたものと想像される。19世紀、20世紀に改修や拡張工事が行われたが当初の雰囲気はそのままに継承されている。当初建設された部分は現在の教会の東部分である。この部分は15世紀に建設されたものである。建物の平面は長方形で野原に転がっている石を利用して建設された(栗石建築ともいう)。その上に煉瓦造りの尖塔が建てられ



写真1 パンカウ教区の教会(Pfarrkirche Pankow)教会内部

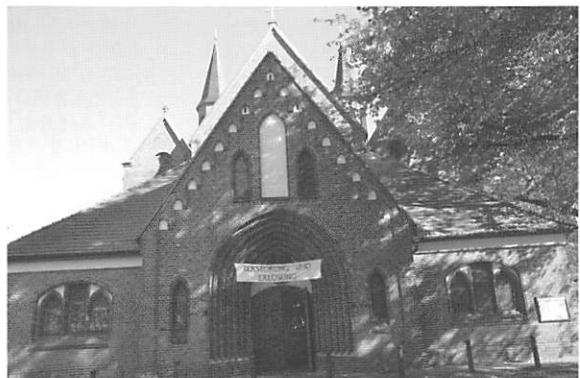
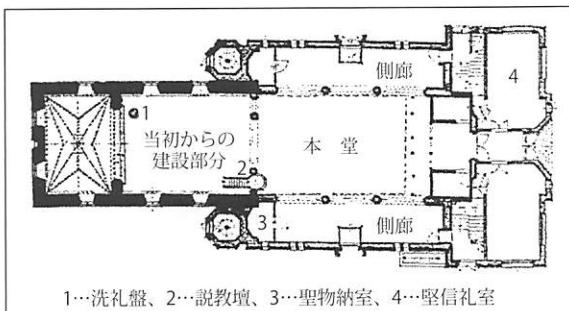


写真2 パンカウ教区の教会(Pfarrkirche Pankow)玄関

図2 パンカウ教区の教会(Pfarrkirche Pankow)平面図³⁾

た。東側の切り妻屋根の三角形の壁面は煉瓦で仕上げられた。三対の盲窓、壁がん(飾り用に設けられた外壁のくぼみ)、二対のゴチックの上部が弓状になった窓は1858/59年にAugust Stüler、宮廷建築家Friedrich WilhelmsIVにより建設された。さらに西側に対し、ネオゴチックのレンガ建築で教会を3つの本堂を持つよう増設が行われた。そして別に切り妻屋根が掛けられた。両側の本堂はやや下がったような形になり、中央の本堂には薔薇窓が切り妻屋根の3角形の外壁に設けられた。これは非常に印象深いモチーフになっている。しかし1908年に西側本堂のホールを建設した際にこの効果が弱まっている。教会内部を写真1に、外観を写真2にまた教会平面図を図2に示す。

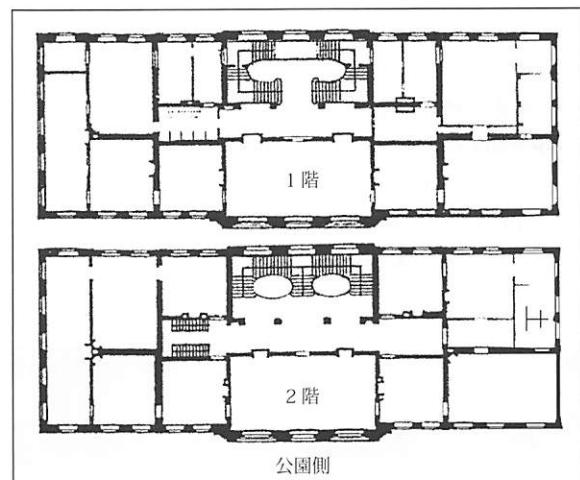
2)ニーダーシェンハウゼン城と庭園 (Schloß und Park Niederschönhausen)

所在地 : Ossietzkystraße Pankow

建設年 : 1664年, 1693年, 1704年

建築家 : Johann Arnold Nering, Johann Friedrich Eosander von Göthe

最初の城はドーナ(Dohna)伯爵夫人が1664年に農具の専門家であった夫の為に簡素な領主の館を計画させたものであった。オランダ調の馬蹄形の形をしていた。その建物は1691年に選帝侯フリードリッヒIII世により買われた。この人物は後のフリードリッヒI世王である。王は1693年にネーリング(Nering)に、1704年にエオザンダー(Eosander)に城に庭園を持つように大改築をさせた。その結果全く新しい建築となり、バロックの装飾品で飾られるようになった。マンサルデ屋根から切り妻屋根に変更された。その結果「役所・ニーダーシェンハウゼン」と呼ばれるようになった。1740年にフリードリッヒII世はこの館を妃に余生を送るための施設として寄贈した。

写真3 ニーダーシェンハウゼン城と庭園
(Schloß und Park Niederschönhausen)正面図3 ニーダーシェンハウゼン城と庭園
(Schloß und Park Niederschönhausen)平面図³⁾

1760年にコザック兵の襲撃により破壊され、疲弊したが、1763/64年にボウマン(Boumann)の設計により、今日ある姿に修復された。階段も対象に2つ設置され、ロココで装飾された。19世紀と20世紀初頭この建物は使用されなかった。1831年にピー・ヨット・レンネ(P. J. Lenne)が城の庭園の南東部分を景園公園に改造した。1935/36年にブロイセンの役所がこの城を1764年の状態に復元した。その際に屋根の修復工事も行われた。旧東独時代にはこの城は国賓の為の迎賓館として使用された。その際にかなりの改修工事が行われた。1990年10月3日以来、ドイツ連邦共和国の所有になっている。城の外観を写真3に、城の平面図を図3に示す。

3)騎士の家(旧ヒルデンブランド家の別荘) (Kavallerhaus(ehem. Hildenbrandsche Villa))

所在地 : Breitestraße Pankow

建設年：18世紀

建築家：不明

正面には7つの窓や、玄関の開口部が設けられた平屋建築で寄棟屋根を有している。18世紀半ばに建設された正面両開きの扉はロココ調であった。当初入口の下段では幅が広く、上段では幅が狭くなる石段には、金属細工された手摺があった。内部の部屋はそれぞれが独立している。各室の扉は上部が半円アーチ窓になっている。建物全体に地下室がある。また屋根裏部屋も存在する。前面道路に向かい玄関前には砂岩のルネッサンス様式の4体の童の像が立っている。1960年にはこの像はコピーと置き換えられた。実物はベルリンのボーデ博物館^{註2)}に収容され陳列されている。様式から作者はドレースデンの彫刻師ゴットフリード・クネッフラー(Gotfried Knoeffler)と想像される。しかし証拠となる文献はない。クネッフラーは1730-1732年の間ベルリンのグルメ(Gulume)の下で仕事をしていたという証拠はある。この建物が「騎士の家」と呼ばれるのはフリードリッヒII世が1740年に妃をニーダーシェンハウゼン城に訪ねた際に



写真4 騎士の家(旧ヒルデンブランド家の別荘)
(Kavallerhaus (ehem. Hildenbrandsche Villa))

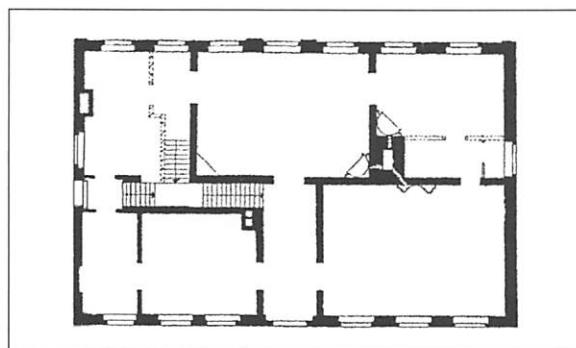


図4 騎士の家(旧ヒルデンブランド家の別荘)
(Kavallerhaus (ehem. Hildenbrandsche Villa)) 平面図³⁾

に宮廷の騎士の為に建てさせた事による。1865年には市民階級のヒルデンブランド家に買い取られたことにより、旧ヒルデンブランド邸と呼ばれるようになった。騎士の家の外観を写真4に、平面図を図4に示す。

4)アマリエン公園の住宅群 (Wohnanlage "Amalienpark")

所在地：Amalienpark 1-8, Breitestraße 2/2a, Pankow
建設年：1896年, 1897年

建築家：Otto March

ブライテ通り(Breite Strasse)とヴォルフスハングナー通り(Wolfshagener Strasse)の間に建設された田園都市風の小型住宅団地である。設計者オットー・マルヒ^{註3)}が英国旅行で感銘を受けた田園都市構想をベルリンで実現したものである。この町づくりはブルーノ・タウトの「田園都市ファルケンベルク」(ユネスコの世界文化遺産)や「森のジードルングオンケルトムズヒュッテ」の設計に影響を与えた。発注者はランドハウス・バウゲゼルシャ



写真5 アマリエン公園の住宅群(Wohnanlage "Amalienpark")
小公園にある男女の彫刻



写真6 アマリエン公園の住宅群(Wohnanlage "Amalienpark")
バルコニーを持つ3階建集合住宅



写真7 アマリエン公園の住宅群(Wohnanlage "Amalienpark")
3階建集合住宅



写真8 アマリエン公園の住宅群(Wohnanlage "Amalienpark")
4階建集合住宅

フト・パンカウ (Landhaus - Baugesellschaft Pankow : パンカウ田舎別荘建設会社) であったが、実はマルヒ自体がこの会社のオーナー社長であった。敷地は100m×160mの大きさで当初そこに田舎別荘風の9軒の賃貸住宅が建設された。敷地中央にはハオプト通り(Haupt Strasse)に向けて広がる小規模な公園が設けられた。この道路に面しては2軒のやや大きめな住宅が建設され、その奥には規模の小さい住宅が広がった。それらは2階建て、もしくは3階建てであった。多くは4室と半室、もしくは5室と半室の大きさで、それぞれに浴室、厨房、そして前面に大きな外に飛び出すベランダが設けられた。いくつかの住宅では内部に幅の広い階段が設けられた。パロック調の切り妻屋根を持つ住棟もある。マルヒは英国で学んだ田園都市の思想を入れて住宅団地内の公園に彫刻も設けた。男女の彫刻を写真5に示す。バルコニーのある3階建て集合住宅を写真6に示す。また3階建て集合住宅を写真7に4階建て集合住宅を写真8に、アマリエン公園住宅群の鳥瞰図を図5に示す。

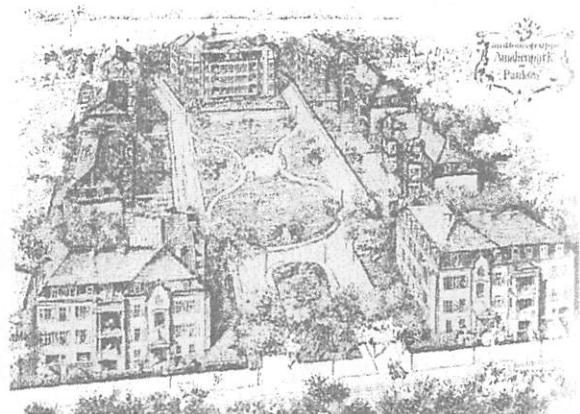


図5 アマリエン公園の住宅群(Wohnanlage "Amalienpark")鳥瞰図³⁾

5) 住宅群 (Wohnanlage)

所在地：Grabbeallee 14-26, Paul-Frankestraße, Pankow
建設年：1908年

建築家：Paul Mebes

建築家メベス(Mebes)が官舎に改革の息吹を引き込んだ有名作品である。建築計画や使用した建築材料は氏が計画したベルリン市シュテーグリツ(Steglitz)の賃貸集合住宅^{注4)}(Fritschweg)と同じで手焼きの煉瓦が使用されている。メベスは質素な古典的建築芸術を用いたが、装飾のあるファッサード、中庭と云った近代建築の手法も用いることで調和をとった。この敷地には174戸の住宅が建てられたが、3階建て住宅は27棟建設された。敷地は平面的にみると3角形をしている。敷地に沿って、敷地の外側にチンガーグラーベン(Zingergraben)と呼ぶ主要自動車道路を設けた。敷地内には自動車走行用に直線ではなく弓状の形をした私道を設けた。後にこの道路はパウル・フランケ道路(Paul Franke Str.)と命名された。この道路から各住棟へ枝道が走っている。全ての住戸が同じ形態をしており、2部屋から5部屋のものになっている。日照を考慮して建設された。住棟の配置は住棟を平行に配置するのではなく、リズムがあるように配慮された。敷地には松の木が多く植栽された。小川が流れる方向には自然が残っており、そこにメベスは子供の遊び場を設けた。住宅団地の敷地図を図6に示す。

この集合住宅には緑豊かな中庭がある(写真9)。レンガ造りの集合住宅にはバルコニーがあり、気候の良い時期にはここで飲食も行われるのであろう(写真10)。レン

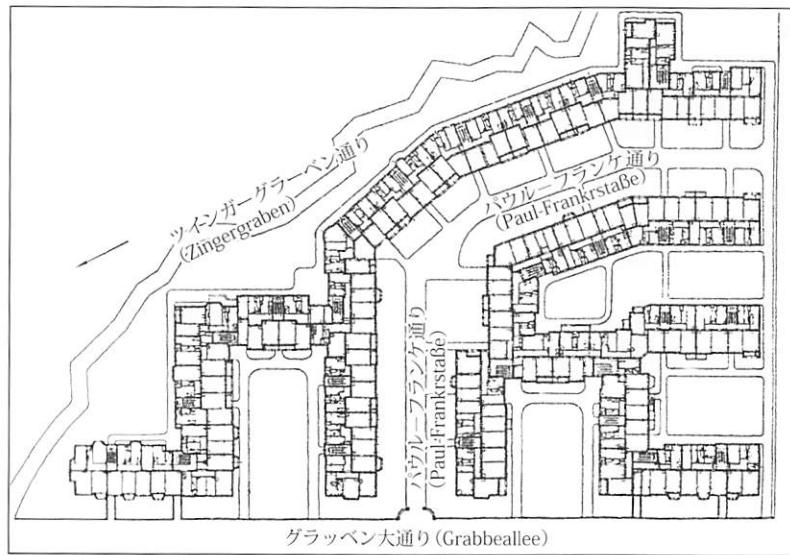


図6 住宅群(Wohnanlage)敷地図³⁾



写真10 住宅群(Wohnanlage)パルコニーのあるレンガ造集合住宅

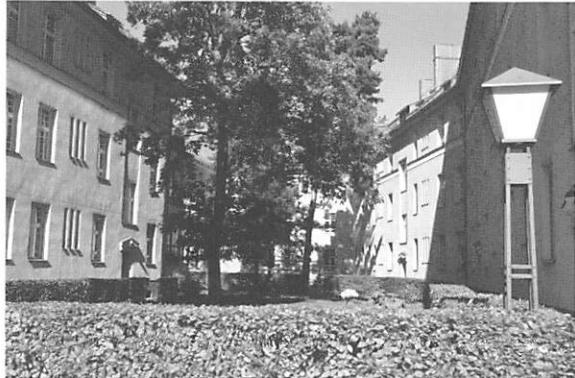


写真9 住宅群(Wohnanlage)集合住宅内庭



写真12 住宅群(Wohnanlage)レンガ造集合住宅の装飾

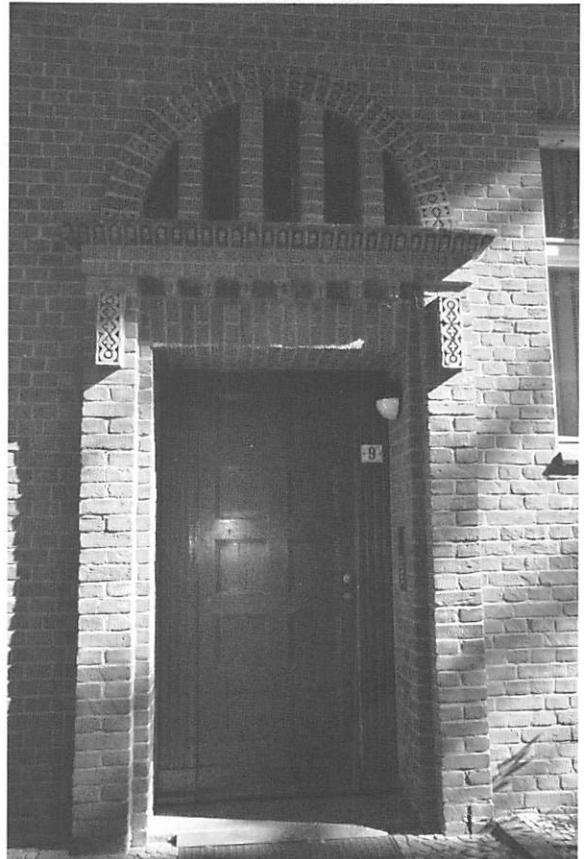


写真11 住宅群(Wohnanlage)レンガ造集合住宅の玄関

ガ造りの集合住宅玄関は装飾が施されている(写真11)。この集合住宅の外壁には様々な装飾があり、住人に心の

余裕を提供しているようにも思われる(写真12)。レンガ造集合住宅の写真を示す(写真13、写真14)。



写真13 住宅群(Wohnanlage) レンガ造集合住宅



写真14 住宅群(Wohnanlage) レンガ造集合住宅

6)学校群 (Schulanlage)

所在地 : Görtschstraße 43／44, Pankow

建設年 : 1909年

建築家 : Karl Fenten, Rudolf Klante, Eilert Franzen

拡張された学校複合施設は20世紀初頭、ベルリンで最も規模の大きいものであった。不等辺四角形の形をした校舎の敷地に多数の校舎の翼が飛び出している。建物の幾つかの出隅部、入隅部には塔状の階段室が設けられ、頂きには飾り屋根がついている。これはドイツルネッサンスの様式である。現在はカール・フォン・オッシツキー・ギムナジウム(Carl von Ossietzky Gymnasium)^{註5)}となっている。

大規模学校建築の外観を写真15に示す。日本ではブライアンドを室内側に設置するのが通常である。しかしドイツではブライアンドは窓の外側に設置する。夏季に日射熱を受けたブライアンドのスラットは放射と対流により外気へ熱を逃がし、室内の熱負荷にならないからである。この学校でもブライアンドはガラス窓の外側に設置されていた(写真16)。



写真15 学校群(Schulanlage) 校舎



写真16 学校群(Schulanlage) 木製の外ブライアンドを持つ校舎

7)保健所 (Gesundheitshaus)

所在地 : Grunowstraße 8-11, Pankow

建設年 : 1926年

建築家 : Eilert Franzen

細長い3階建ての建物である。建物中央には自動車が建物の中庭に入れるように侵入路がある。壁面は装飾

富んでいる(写真17)。1階部分には半円アーチ窓が付いている。その上は軒蛇腹で上階につながっている。壁面は陶製タイルで装飾され、特に車の進入路の上はジグザグ状の模様となっている(写真18)。建物の正門ではないが、脇にある門の周囲も装飾に凝った仕上げとなっている(写真19)。



写真 17 保健所(Gesundheitshaus)正面玄関



写真 18 保健所(Gesundheitshaus)タイル装飾



写真 19 保健所(Gesundheitshaus)建物の脇にある入口

写真 20 旧ガルバティ煙草工場(Ehm. Zigarettenfabrik Garbaty)
現在は小学校に転用されている

8) 旧ガルバティ煙草工場 (Ehm. Zigarettenfabrik Garbaty)

所在地 : Hadlichstraße 44

建設年 : 1930／31年

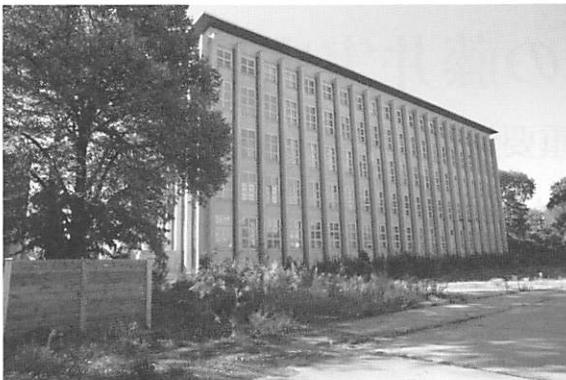
建築家 : Fritz Höger

中心の建物は1906年にパウル・イーバーホルツ(Paul Überholz)の設計によりユーゲンドシュティール^{註6)}から派生した新古典主義の様式で建設された。1930／31年に会社は東の方向に21のスパンがある5階建の建物を増設した。この建物は幅56m、奥行き9mの規模であった。後方は既存建物に接続するように建設された。ヘーガーはここに建築の形態として素晴らしい近代性と構造の単純さを示した。正面の鉄骨ラーメン構造を支える柱は白黄色のクリンカータイルで被覆した。屋根は陸屋根で庇が出ている。この建物の一部は現在では小学校として使用されている。疲れを知らぬ子供たちが歓声を上げて校庭を走り回っていた(写真20)。現在は使用されていないのであろう、雑草が茂る工場跡を写真21に示す。

稼働中の工場もある(写真22)。

おわりに

ベルリン・パンカウ区に存在する筆者の好みによる建築を紹介した。パンカウ地区にはこれだけでなく、Kissingen-Neumann, - Stubnitz -, Granitzstraßeにある1925／30年に建設された集合住宅群(Paul Mebes, Paul



Emmerich, Jakobus Goettel設計)やPetzbacher Weg, Kissingerstraße, Prenzlauer Promenadeにある1929/31に建設されたツエペリン住宅群(Zeppelinhäuser)(Walter Borchard, Georg Thofehm設計)も価値がある建築である。



4. Paul Mebesが1907/08年にFrischweg, Steglitzに建設した田園都市風の集合住宅で現存する。
 5. 1889年10月3日、ドイツのハンブルクで生まれた。ドイツ平和協会に間わり、第一次世界大戦後に同協会の書記をつとめた。戦間期においても積極的に反戦運動を展開し、1927年に雑誌『世界展望(Die Weltbühne)』を創刊した。1931年、オシエツキーはこの誌において、ドイツの軍隊がヴェルサイユ条約に違反して軍備を拡張する準備を進めていたことを、ドイツ空軍について公にした。オシエツキーはこの一件で反逆罪に問われ、18ヶ月の自由刑を宣告された。アドルフ・ヒトラー率いる国家社会主義ドイツ労働者党(ナチス)が政権を掌握する1933年、ドイツ国会議事堂放火事件の後、ゲシュタポはオシエツキーをベルリンの刑務所、そのあと強制収容所に送った。

1936年のベルリンオリンピックの前に、病気を理由として強制収容所から釈放され、前年に受賞が決定していたノーベル平和賞を改めて受賞した。

1938年5月4日、拘留中にかかった結核で没した。48歳没。後に、本人の名を冠した平和賞が国際人権連盟によって創設された。

ギムナジウムとはドイツの高等学校で日本の旧制高等学校に相当する。入学、卒業が困難であるが、卒業すると無試験で大学に入学できる。

6. Jugendstil, 青年派洋式(1897~1910年のドイツの芸術思潮)ほぼ1890年から1910年にかけて芸術運動が欧州で起こり、これはアール・ヌーヴォーと呼ばれた。ドイツ語圏では特にミュンヘンで1896年に刊行された雑誌ユーゲンド(Jugend)による。建築に関してはダルムシュタットにユーゲンドシュティールの建築群を見る事が出来る。

〈参考文献〉

1. Rolf Rave, Hans Joachim Knöfel, Bauten Seit 1900 in Berlin, Vrlag Kiepert, Berlin
2. Berlin Brandenburg, Ein Architekturführer Ernst & Sohn
3. Architekturführer Berlin, Dietrich Reimer Verlag Berlin
4. 田中辰明「ブルーノ・タウト・日本美を再発見した建築家」、中公新書2159
5. 田中辰明「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会
6. 田中辰明「バウハウス(ヴァイマル)」月刊建築仕上技術2014年8月号、工文社
7. 田中辰明「バウハウス(デッサウ)」月刊建築仕上技術2014年9月号、工文社
8. 田中辰明「バウハウス(ベルリン)」月刊建築仕上技術2014年10月号、工文社
9. 田中辰明「ナチス好みの建築」月刊建築仕上技術2014年11月号、工文社
10. 田中辰明ホームページ <http://tatsut.org/>